Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

植民地の身体とナシオンの身体（〔小特集〕エルザ・ドルラン『人種の母胎』合評）

廣田，郷士

(Citation)
綜合文化,1:86-97

(Issue Date)
2025-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100496704

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496704

〔小特集〕エルザ・ドルラン『人種の母胎』合評

小特集によせて

現代フランスを代表する哲学者の一人であるエルザ・ドルランの主著『人種の母胎 性と植民地問題からみるフランスにおけるナシオンの系譜』（Elsa Dorlin, *La matrice de la race. Généalogie sexuelle et coloniale de la Nation française*, Paris, La Découverte, 2009）が、2024年に人文書院より翻訳刊行された。同書は、フランスにおける性と人種をめぐる「解きがたく結びついた」支配の構造が、医学的言説を通じて構築されてきた過程を丹念に解き明かした、科学論・認識論的研究である。

ジェンダー史、医療史、植民地史にまたがる同書の広大な意義を検討すべく、訳者であるファヨル入江容子氏（甲南大学、フランス哲学）をお招きし、2024年7月28日に神戸大学文学部にて公開合評会を開催した（主催：神戸大学文学部フランス文学専修）。合評会導入となるファヨル入江氏による講演では、エルザ・ドルラン氏の研究とその文脈、『人種の母胎』の概要と同書以後の彼女の仕事について詳細にご解説いただいた。その後、廣田郷士（神戸大学、フランス語圏文学）、天野由莉氏（武蔵大学、アメリカ史・医学史）、大橋完太郎氏（神戸大学、表象文化論・フランス思想）が評者となり、それぞれの専門分野の極めて多様な――しかし解きがたく結びついた――観点から、『人種の母胎』の射程について、四時間以上にわたり議論を交わした。合評会での活気に満ちた議論をもとに、今回本誌では同書をめぐる小特集を組み、評者三名による書評論文を掲載することとなった。

最後に、合評会への参加と本特集への投稿をご快諾いただいた天野先生と大橋先生、そしてご講演をくださったファヨル入江先生に、この場をお借りして感謝申し上げます。

（廣田郷士）

植民地の身体とナシオンの身体

廣　田　郷　士
（HIROTA Satoshi）

1. はじめに―「植民地」から『人種の母胎』を読むためのいくつかの描線

エルザ・ドルラン『人種の母胎 性と植民地問題からみるフランスにおける

ナシオンの系譜』（ファヨル入江容子訳、人文書院、二〇二四年）は、フランス社会における従属的身体が形成される過程において、性的差異化の形成が人種的階層化の形成の鋳型となったことを丹念に解き明かす研究である。性のカテゴリー化と人種のカテゴリー化が交差する歴史的過程を、一七世紀・一八世紀の医学言説の分析を中心として分析した同書のテーマは、気質説、人口政策、保健衛生など多岐にわたっている。学際的視座にたった同書の射程は、哲学・認識科学・植民地史研究を含め、極めて広大な学術的地平を描いている。

同書の詳細な内容と議論については、同書及び巻末の訳者あとがきの丁寧な解説を参照されることとして、本稿では特に植民地という文脈に焦点を絞って同書の意義と射程を検討してみたい。特に同書第三部「人種の発明」において展開される議論を中心として、テクストの内外を往還させながら、同書が潜在的に描きうるいくつかの線を導きの糸を、検討を行う。同書から本稿で導き出してみたい三つの描線とは、植民地へ移送される女性、人種とその混血、そして支配をめぐる「合理化」である（なお、同書からの引用については、本文中に（　）書きで頁数のみを記すこととする）。

2.「ファム・ファタル」のゆくえ—監禁と追放

騎士であり将来を嘱望されていたシュヴァリエ・デ・グリューは、絶世の美女マノンと出会う。その美に心奪われたデ・グリューは、全てをなげうって可憐な娼婦との恋に落ちる。度重なるマノンからの裏切りにもかかわらず、彼女への恋心に囚われた青年騎士は破滅的な運命をたどる。しかし幾度もの不貞の罪によって、マノンは官憲に捕まり流刑の宣告をうける。マノンを救おうとするデ・グリューは、自らも流刑船へ同乗し、マノンと運命を共にすることを決心する。愛の逃避行を選び、見知らぬ流刑先に送り込まれ、そこで共に逃亡することを選択した二人は、しかし飢えと乾きに喘ぎ、彼の地でマノンはデ・グリューを残して息絶えてしまう。

一八世紀フランスのファム・ファタル小説として名高いアベ・プレヴォーの作品『マノン・レスコー』（初版一七三一年）の粗筋をここに紹介したのは、エルザ・ドルラン『人種の母胎』の議論の一端が、実はこの小説の中に克明に描き出されているからに他ならない。それは、管理・監禁される女性の身体と、そのような身体がゆえに追放された者たちの流れ着く「新世界」（植民地）という空間、これら二つが歴史的に交錯する地点である。このことをひとまずは、ドルラン著作の特に第三部「人種の発明」の議論から考えてみよう。

性的差異の概念化を鋳型として人種概念が構築されてきた歴史を暴くドル

ランの仕事であるが、しかし彼女の人種批判は、一八世紀後半から一九世紀にかけての顔面角の測定や骨相学の潮流といった、いわばすでに古典的となった「人種理論」に対して繰り返されることはない[1]。そうではなく、「気質」概念から出発するドルランの慧眼が向かうのは、「人種の発明」の過程において不可欠となった「新世界」（植民地）の存在、より焦点を絞ればカリブ・アメリカ植民地における「農園主による支配体制（プラントクラシー）」の形成である。「私の関心を惹くのは、一八世紀、コーカサス地方の女性が取引される性奴隷市場に関する記述の登場と、大西洋奴隷貿易の隆盛が時期を同じくしている点である」（二五三頁）、こう述べるドルランにとって重要となるのは、「旧世界」（ヨーロッパ）における人種主義・人種階層意識の成立と、奴隷貿易・奴隷労働に基礎づけられた「新世界」（アメリカ）という植民地の発展とが、互いに連動しているという世界史的事実である。ドルランの議論に従えば、「旧世界」と「新世界」、これら二つの間には相矛盾した秩序が成立している。それは、規範的身体を形成・保持しようとするヨーロッパの秩序空間と、旧世界の規範を逸脱した身体が送り込まれるアメリカという新しい空間である。ドルランに従ってなお説明を加えれば、新世界に設置されたフランスの植民地・海外領土とは、「道徳的逸脱と身体的衰弱の場であるとも考えられていた」（二五四頁）のであった。

では、一見すると『人種の母胎』の議論には接近しそうにないあの恋愛悲劇の名作は、どのように解釈できるだろうか。デ・グリューを破滅的な運命へと追いやる美女マノンは、しかし同時に一八世紀初頭においては危険な娼婦として、すなわち治安維持（ポリス）の対象となる存在でもあった。問題となるのはそのような「危険な」女性の身体の送り先である。ドルランの言にならって問い直せば、一八世紀フランスという形成途上の「ナシオン」の身体において、規範にそぐわない、病理化された娼婦という女性の身体は、はたしてどこへと送られることになるのだろうか。その答えは、『マノン・レスコー』の物語を構成する重要な要素として、幾度も現れている。ファム・ファタルの行く末が明示される箇所を、二つほど引用しておこう。

> 我々は、警視総監の命令によって、彼女［マノン・レスコー］をオピタルから連れてきたのです、と彼［監視人］は言った。―善いことをして、あんな処へ監禁されるはずはありません。[2]

> 彼らは［…］連れ立って、警視総監の許へ出かけた。そして二つの恩典を要求した。その一つは、私［＝デ・グリュー］を即座にシャトレーから放免することで、他の一つはマノンをこれから先、一生涯幽閉しておくか、またはアメリカへ護送することであった。当時、多数の浮浪人た

1
Nicolas Bancel, Thomas David et Dominic Thomas (dir.), *L'invention de la race : des représentations scientifiques aux exhibitions populaires*, La Découverte, 2014.

2
Abbé Prévost, *Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut* [1731], texte établi par Frédérix Deloffre et Raymond Picard, Éditions Garner Frères, 1965, p. 12（アベ・プレヴォ『マノン・レスコー』（河盛好蔵訳）、岩波文庫、二〇〇七年、一五―一六頁）.

ちが、ミシシッピーへ向けて船に積め込まれていたのだ。警視総監はマノンを最初の船で出発させることを彼らに保証した。[3]

『マノン・レスコー』において繰り返し現れる「オピタル」とは、サルペトリエール病院に代表されるような病院（オピタル）のことであり、一般に「一般施療院」ないしは「感化院」と呼ばれた、浮浪者や性病患者、精神疾患患者や娼婦などが監禁された施設すなわち Hôpital général のことである[4]。一八世紀古典主義の時代におけるこのような「オピタル」、それはミシェル・フーコーが『狂気の歴史』において丹念に掘り起こした時代の施設、すなわち処罰と監禁の空間である。フーコーいわく、この時代「性病患者、放蕩者、浪費家、同性愛の人々、瀆神者、錬金術師、無宗教者―こうした雑多な人々全てが、十七世紀後半に一挙に、一本の分割線の向こう側に投げ棄てられ、施設の中に閉じ込められたのだった。[…] 突然、一つの社会的空間が開かれ、その境界線が定められたのだった[5]」。社会的空間に敷かれた境界線の「向こう側」に位置づけられるこの「オピタル」にこそ、「危険な娼婦」であるマノンという逸脱した身体は収容され、監禁されることとなる。デ・グリューに対して「体の貞節」ではなく「心の貞節」を願うマノン―「私があなたにお願いしますのは心の操なんですから」[6]―、彼女の美しいはずの肉体の具体的特徴は、小説中では決して具体的に描写されることはない[7]。そのような、いわば「肉体を持たない」彼女の身体そのものが置かれるのは、しかしパリに設立されて間もない監禁施設の描く「分割線の向こう側」の世界にほかならない。それはつまり、身体的・道徳的に「衰弱」した女性の身体が、物理的にも社会的にも排除されるということでもある。

そして、一旦は「オピタル」に監禁・排除された女性の身体が最終的に追放される先こそが、フランスの植民地たる「アメリカ」、すなわち新旧二世界を分かつもう一つの「分割線の向こう側」である。こうしてマノンの身体は、形成途上の「ナシオンの身体」の外部として置かれることなのである。プレヴォーはこの小説の着想を、新大陸経営を担うミシシッピ会社を設立したイギリス人ジョン・ローから聞いた「不幸な女性たちの話」から得たと言われているが、このような「不幸な」女性たち、「処罰」と「監禁」の対象となったヨーロッパの女性の法外な身体が多数送り込まれることになる新世界、そこにまた、植民地における人口上のジェンダー・バランス―そして人種バランス―の問題が介在することになる。むしろそのような身体であってもなお、それがヨーロッパの女性である限りにおいて、「農園主による支配体制」下の新世界の「需要」には適っていたのである。「施設」から「新世界」への女性たちの移送、それをドルランは次のように説明している。

3
Prévost, *Ibid.*, pp. 164-165（プレヴォ前掲書、二二六頁）.

4
ただし同作中で « H(h)ôpital » の語は管見の限り三十五回用いられるが、いずれにも « général » の形容詞は付されていない。

5
Michel Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Gallimard, 1972, p. 116（ミシェル・フーコー『狂気の歴史』（田村俶訳）、新潮社、一九七五年、一二二頁）.

6
Prévost, *Ibid.*, p. 147（プレヴォ前掲書、二〇一頁）.

7
Jacques Proust, « Le corps de Manon », *Littérature*, n° 4, décembre 1981, pp. 5-21（ジャック・プルースト「マノンの肉体」（鷲見洋一訳）、『思想』、一九八四年三月号（第七一七号）、岩波書店、五二－七六頁）.

> その目的は、何よりも入植者の人口を増やすことだった。問題は、植民地にヨーロッパ人女性がほとんどいないことだ。しかし、同意の上での結婚よりもはるかに強制結婚が多く、そうした婚姻により「白人」と「黒人」の混血の子供が生まれた。このような子供たちにどのような身分を与えるべきか誰も知らなかったため、「無秩序」と思われるこの事態を改善するために、入植者たちや海軍省の行政官たちは、できるだけ多くの「白人」の女子を植民地に送り込み、結婚させようとした。海外県の公文書館には、「女性たち」、つまり「白人」の女性たちを求める入植者たちからの要請が多く残されている。（三三七頁）

ここに、ヨーロッパ人女性の身体の管理・監禁と、植民地における支配の構築とが、密接に繋がり合うことになる。少数の白人男性を中心とした「農園主による支配体制」、その奴隷制社会において発生した「無秩序」に「秩序」をもたらす存在として、ヨーロッパの「逸脱した」女性の身体は一役買ったというわけである。人種間の混血に歯止めを、白人同士による再生産（リプロダクション）を促進すること、それは何よりも「道徳的逸脱と身体的衰弱の場である」植民地における「支配体制」の維持に繋がることとなる。こうして、「女性の身体」をめぐるヨーロッパからの「供給」と植民地からの「需要」とが、ある種合致することとなり、かくしてファム・ファタルの監禁と追放は、植民地における人種的再生産に基づく支配体制の継続と、表裏一体となったのである。

3.「人種」のゆくえ―秩序と混血

「農園主による支配体制」が人種的ヒエラルキーに基づく限り、ヨーロッパから送られる「病理化された」身体と、アフリカから大量に移送される身体との間それ自体には、決定的なヒエラルキーが存在するということでもある。逸脱と不道徳によって排除され移送されてきたヨーロッパの女性たちですら、植民地では道徳的特権を付与されるからである。「[植民地においては] 白人女性に美徳の特質と特権を与えたのは、黒人女性のいわゆる不道徳さだった。堕落に色がついたのである」（三三九頁）。

かくして堕落が人種化されていく（「色がつく」）歴史的過程において、性的差異を説明する分析概念としての気質が今度は人種階層を説明する概念へと移行的に応用されていくのである。ドルランは例えばカール・フォン・リンネの分類学の中に、気質概念の応用の端緒を見て取っている。「一八世紀における人間の変種に関する議論には、人種の生物学化に介在する候補がいく

つかあったにもかかわらず、気質という用語の使用は肌の色の問題だけに焦点を当てすぎてきた現代の論者からは比較的注目されてこなかった。しかし、一七六六年、博物学者リンネは、著書『自然の体系』において、気質概念に基づいて人類を分類した。こうしてリンネは、人間の系統表を作成する際、人間の体液的な区分に基づき、人種本質論を展開したのである。[…] リンネによれば、アメリカ人は胆汁過多の気質であり、ヨーロッパ人は多血質、アジア人は憂鬱質である。そして、アフリカ人は粘液質である」(二九八－二九九頁)。このような気質「概念」は、いわば分析と支配の「道具」でもあった。それゆえ「気質」は以後政治的カテゴリーである性と人種とに適用されることとなり、新大陸における農園主による支配の正当化にも役立てられることになるのである。

実際、一八世紀当時の記述を追ってみると確かに、人種的性質・性格を記述する際に「気質」(tempérament)、「体液」(humeur)概念が分析の道具として用いられていることがよくわかる。ドルランはアンティル諸島の文脈では決して引用はしてはいないが、ラバ神父『仏領アンティル諸島滞在記』(初版一七二二年、第二版一七四二年)においても、アンティル諸島(カリブ海)に暮らす黒人奴隷の性格を説明する「道具」として、「気質」概念が用いられていることが読み取れる。

> 現地の黒人たちについては、彼らの熱しやすい気質(tempérament)、浮気で放埒な体質(体液:humeur)に加えて、ありとあらゆる罪を簡単に犯してしまう傾向、罪を犯しても平然としている厚顔無恥などを考えてみれば、彼らがキリスト教に帰依するのにふさわしくないことは当然の理である。[8]

気質概念を基としたこのような病理的他者が人種的に措定されること、さらには熱帯地域における病理学に応用されることで、奴隷制度そのものが「合理化」されることになるのである。

だが、監禁施設に置かれたマノン・レスコーのような「不道徳な」身体が、「植民地の無秩序」を改善するために監禁施設から植民地へ移送され、人種化された気質的「美徳」によって今一度植民地に「秩序」がもたされるのであれば、そのような植民地の「無秩序」とは、奴隷制度を基礎づける人種階層とその侵犯によってもたらされるものに他ならないのではないか。すなわち、白人プランテーション経営者(男性)と黒人奴隷(女性)との間の姦淫と、その結果「混血」という人種的ヒエラルキーにとっての「予期せぬ存在」が生み出されることによってこそ、植民地における「無秩序」なるものは生じるのである。「どのような身分を与えるべきか誰も知らなかった」この混血と

8
Jean-Baptiste Labat, *Nouveau voyage aux isles de l'Amérique*, Tome 2, P. Husson (La Haye), 1724, p. 43 (consulté en ligne le 24/12/2024)(ジャン＝バティスト・ラバ『仏領アンティル諸島滞在記』(佐野泰雄訳)岩波書店、二〇〇三年、二八七頁(本論の趣旨に合わせて一部改訳)).

いう存在は、いわば非嫡出子であり、それゆえにヒエラルキーもジェネアロジーも逸脱する「無秩序」であった。そのような「無秩序」は、一種の「混血への恐怖」をよび起こすことになる。「際限なく微妙な色合いの違いのある、無数のタイプの身体を持つ人間たちが出現すること」への不安、「白人でもなく黒人でもなく、自由人でも奴隷でもない子供たちの地位」への疑問、ひいては「必然的に自分たちの敵となる人種を増やすこと」への恐怖となるのである（三四一－三四二頁）。それゆえファム・ファタルによる「秩序」の維持とは、認知の支配のジェネアロジーを維持することでもあり、言い換えればそういったジェネアロジーを人種階層的に逸脱する予期せぬ存在こそが、植民地社会において対処すべき存在、あるいは抹消すべき「無秩序」として現れることになるのである。

4.「合理性」のゆくえ―支配と認知

気質概念を通じた従属的身体の形成が性から人種へと応用されること、そのような「性」の病理化と「人種」の病理化のパラレルな関係性を掘り起こそうというドルランの野心の根底には、しかしおそらくは彼女の最も大きな問題意識が流れている。それは、支配の合理性が「自己再編」を繰り返すことによって、いかにして支配が「継続」しているか、という点への根本的な意識である。このことは、ドルランがあらかじめ強調している点でもあるので、ここで引用しておこう。

> 私の研究のアプローチの第二の指針は、性差別と人種差別を生み出した支配者たちの合理性に焦点を当てる一方で、こうした合理性の峻厳な論理や最適な機能性よりも、それが被る危機に主に関心をよせることにある。合理性が危機に直面するという事実は、まずそれが歴史性をもつということを証している。というのも、激しく論争がなされたり、あるいは単に支離滅裂で欠陥があったりしながらも、合理性は支配の継続性を保証するために自己再編を繰り返してきたのである。　（一〇－一一頁）

つまりドルランの著作の議論の根底にあるのは、女性や黒人の身体が気質概念を基に具体的にどのように記述されてきたかということではなく、その記述＝合理性が、いかなる歴史的危機を経て、なお支配を継続させるために変遷し組み替えられてきたかという事実である。やや逆説的な言い方かもしれないが、一見「合理性」によって導かれる「支配」が、実際には「支配」によってこそ「合理性」が導かれること―同著で繰り返し用いられる言葉でい

えば合理性が「捏造」されること―を暴き出すことこそが、ドルランの問題関心の最も重要な点に他ならないのである。このような「支配の継続」と「合理性の自己再編」いう観点から見たとき、例えば一八三三年のイギリス領における、そして一八四八年のフランス領における奴隷制廃止（奴隷解放）という画期的な歴史ですら、実際には組み替えられた「合理性」のもとでの「支配の継続」でしかなかったことは、容易に理解できることだろう[9]。

そして、かつて「熱帯」に環境での労働に「適した」とされた黒人の身体―逆に言えば「寒冷」な環境での労働に不向きとされた身体―は、支配の「合理性」が再編成される中で、全く逆の論理をたどることとなる。一八世紀末の保健政策を担った医師ハレによれば「アフリカの灼熱の砂漠で生まれ、寒冷地ではすぐに衰弱してしまう黒人は、暑い地域に土着の、あるいは相応しい住人」（三一九頁）であり、熱帯の植民地における奴隷制度によってこそ彼ら黒い身体の「健康」な身体が保たれる、そのようにかつての支配は「合理化」＝正当化されていたはずであった。しかし、寒冷な環境での労働に不向きとされた彼らの身体への支配は、新たな歴史的危機を被りその結果支配の「合理性」が再編成されることによって、今度は逆に寒冷な環境へと適用されることとなる。その一例として、「セネガル狙撃兵」と呼ばれる、第一次世界大戦下での西アフリカ歩兵の徴集の歴史を、ドルランの議論に従いながら位置付けてみよう。

小川了の研究によれば、二〇世紀の奴隷貿易にもなぞらえられるセネガル歩兵の召集―「[西アフリカでは] 奴隷貿易が続いた四世紀の間どの四年余の期間に捕らわれた人の数より第一次大戦時の四年余の間に徴兵された人の数のほうが多」かったという[10]―をめぐっては、その実現に至るまでの様々な議論があったという。「ナシオン」の身体の防衛のために動員される彼らアフリカ人の生身の身体、それはかつての支配の「合理性」からすれば「寒冷」な環境には不適合なものとされていたはずである。しかし普仏戦争を経て二〇世紀に入ると、隣国ドイツの急激な人口増加と対照的なフランスの人口減、それに伴う国防の危機に対処すべく、植民地出身者を徴集することの必要性がフランスにおいて本格的に議論されることになる。だが、小川によれば当初アフリカ人の徴集に関してはいくつかの論点から反対する論調が強かったという。一つは、西アフリカから大量に人を徴用することによって西アフリカ現地の開発が遅れるのではないかという危惧、二つ目はまさに黒人の身体が寒冷なヨーロッパの環境と軍隊規律に耐え得ないのではないかという疑問、そして三つ目がヨーロッパ人とアフリカ人の間に避けがたく起こる混血に対する恐怖、である。このような疑念と恐怖に応える形で、アフリカ人徴集不可避の論陣を張ったのが、フランスの軍人シャルル・マンジャン（Charles Mangin, 1866-1925）将軍である。マンジャンの著作『黒い力』（*La force*

9
つまり、「自由」で流動的な労働力に依存することで可能となる、産業資本主義体制の拡張というあらたな「支配」の継続である。Cf. Eric Williams, *Capitalism and slavery* [1944], The University of North Carolina Press, 1994（エリック・ウィリアムズ『資本主義と奴隷制』（中山毅訳）、ちくま学芸文庫、二〇二〇年）.

10
小川了『第一次世界大戦と西アフリカ フランスに命を捧げた黒人部隊「セネガル歩兵」』、刀水書房、二〇一五年、vi 頁。本稿でのセネガル人歩兵徴集に関する記述は、主に小川の研究による。

noire, 1910）は、論理的には不整合な点を多々含みながら、アフリカ人の軍人としての卓越した性格を強い調子で主張し、アフリカ兵徴集の必然性を訴えている。その際に、マンジャンが論拠として取り上げるのが、黒人の身体の「特性」である。

> 黒人は生まれつきの戦士、というより軍人なのである。なぜなら、彼らは規律とはどういうものかを理解し、したがって彼らに軍というものを教えるのは簡単だからだ［…］。これは、未開人たちに反射作用を教えるのは実に簡単だという事実に基づいている。［…］意識の領域をほとんど通過させずに、無意識的にことをなすことに、彼らは慣れているのだ。[11]

> 黒人種における神経組織の不十分さは戦いにおいて貴重なものとなる。黒人兵は戦いにおいて無感覚であること、他のいかなる人種にも勝り、それゆえに抵抗力に優れ、行動力の優秀さが保証されるのである。黒人たちの気楽さ加減、そして運命を受け入れる従順さ、それらは兵士として優れた資質となる。[12]

第三共和制下の植民地拡張政策の最前線で、西アフリカ各地の「平定」に功績を挙げたマンジャンによるこのような記述と論理は、『人種の母胎』の議論との相違点もありながらも―確かにマンジャンは「気質」という語を分析の道具として用いることはほとんどない[13]―、同時にドルランの描く支配の歴史との大きな連続性、すなわち「性と植民地をめぐるフランス国家の系譜学」の上に成り立っていることがわかるだろう。「世界戦争」という人類史上の「危機」を前にして、彼ら黒人の身体は寒冷なヨーロッパでの戦闘においてはむしろ「貴重」であり「優れた資質」を有したものと記述されている。意識の不在、「反射作用」、「神経組織の不十分さ」といった身体的な「不完全さ」によって説明そして合理化されるこのようなアフリカ兵徴用の論理は、まさに支配の継続を可能とする「合理性の再編成」ないしは「捏造」の系譜学上に、位置づけることができるだろう。

そしてこのような論理で徴用されるセネガル歩兵の存在もまた、植民地における「正統な息子」の認知の問題という、『人種の母胎』第十一章「ニグロの病気」における議論を想起させることだろう。アメリカ植民地において白人と黒人との間に生まれた、認知しがたい混血の「ムラート」は、白人農園主による支配システムにおける「非嫡出子」でありながら、その支配システムそのものの中に取り込まれていった。それはつまり、「ムラート」を正統な子供とは認知せず、しかし逃亡奴隷の追跡や監視のための治安部隊として採用していく、という戦略である。ドルランはそのような統治の技術を、すべ

11
Charles Mangin, *La force noire*, Hachette, 1910, p. 236（consulté en ligne le 24/12/2024）（小川前掲書、二九頁）.

12
Mangin, *Ibid.*, p. 252（小川前掲書、三一頁）.

13
唯一使われた箇所でも、マンジャンは確かにアフリカの様々な民族（races）ごとに「気質」（tempérament）が異なることを前提としているものの、主眼は黒人一般の「兵士」としての優れた性格を強調することにあった。「これら［アフリカの］様々な民族ごとに特有の気質、習俗、言語はあるが、いずれの民族にも共通してあるのは軍事的性質であり、いずれも優れた兵士たちを供給してくれるのだ」（Mangin, *Ibid.*, p. 275.）。

ての民族（peuple）を偽造しようとする介入主義の一環すなわち「ジェノテクニック」の一つと呼んで、次のように説明している。

> 植民地権力にとって、「ムラート女性」を熱い気質と性的不品行を理由に不妊の女性とし、売春に従事させるということは、自らに道徳的・社会的な免罪符を与えることであり、また、支配的かつ文明化された賢明な男らしさの体現を継続する方法であった。同様に、「ムラート男性」を植民都市の警備員、民兵、兵士にすることで、彼らを防衛されるべき社会の外に置き、そこに定住させなかった。それは、敵ではなく味方として、彼／彼女らを死に追いやる方法である。いずれの場合も、植民地におけるフランスの子供たちは、国民（Nation）から排除された。彼／彼女らは「母」としても「息子」としても認められなかった。すなわち、政治的には抹殺されたのである。（三四八頁）

「ムラート」（混血）という、植民地の秩序の中で生じた「予期せぬ」身体は、それが女性の場合は「熱い気質」を有した不道徳な存在として排除され、それが男性であれば秩序を守る傭兵として動員された。いずれも、社会の「外部」に置かれ、国民の「認知」を与えず、しかし「敵ではなく味方として、彼／彼女らを死に追いや」られていくのである。このような「ジェノテクニック」という統治技術こそ、実際セネガル歩兵と彼らのその後に応用されていると言って良いだろう。ナシオンの正統な嫡子とは決して認知されない彼らは、フランス祖国防衛の傭兵として駆り出された後、第一次大戦後になるとフランス国内の社会主義者たちの弾圧のため、すなわち内憂に対処する傭兵として動員されることとなり[14]、さらに第二次世界大戦末期には、フランス兵というナシオンの正統な息子たちによって虐殺される――一九四四年のティアロイの虐殺[15]―。そうして、セネガル歩兵たちは果たしてナシオンの正統な嫡子として認知されたのか、それは本稿では議論しつくせないほどの数多の疑問を残したままとなっている。ジェノテクニックをめぐるドルランの議論は、かくして国民の系譜にとどまらず、その歴史認識の問いとして深く突きつけることになるのである。

14
小川前掲書、四〇頁。

15
Camp de Thiaroye, film réalisé par Ousmane Sembène（1991；ENAPROC / Filmi Doomi Reew/ Filmi Kajoor：2005；médiathèque des trois monde（DVD））.

5. おわりに―「予期せぬもの」のゆくえ

本稿では特に植民地という位相に焦点を絞り、ドルランの著作の意義と射程をそのテクストの外部に開きながら検討してきた。本稿を閉じるにあたり、同書エピローグに描かれる「ブラック・カリブ」への言及をめぐって、歴史

における「予期せぬもの」の存在の意義を明らかにしておきたい。

その歴史を知らないものにとってはややミステリアスな、それゆえにやや唐突な印象を抱かせる、アフリカ人と先住カリブ人との間の混血の民「ブラック・カリブ」。人類学者のロジェ・バスティドによれば、「ガリフナ」とも呼ばれるこの民は、現在のベリーズやホンジュラス周辺に集団で強制的に移送されたのち、その後カリブ族の言語や伝統を保持しながらも歴史からは隔絶した生活を送ってきた[16]。歴史の中で産み落とされた認知し得ないもの、ジェノテクニックの穴を縫うように産み落とされ抹消されてきた「ブラック・カリブ」という予期せぬ存在、ドルランはそれをジェノテクニックによる「支配の技術を逸脱させ、転倒させ、さらには人種なるものを解体する」「突然変異」（三七二頁）と呼ぶ。

先住のカリブ族とアフリカから移送された黒人奴隷との間に、文化的接触は決してなかったわけではない。むしろ植物の知識や伝統工芸、また言語などは、絶滅したカリブ族とアフリカ人の間では積極的に交わされ、発展的に伝承されていった。そしてアンティル諸島の文学の始まりもまた、先住民がその存在の痕跡を刻んだ「書かれた岩」であった[17]。しかし、ときに抹消され、またときには支配権力の知によって簒奪・再編され、あるいは彼ら自身によって秘匿されてきた、このような接触の歴史は、公式の歴史記述すなわち大文字の〈歴史〉においては、存在しないものとして抹消されてきた。しかしドルランの〈歴史〉へのアプローチにおいて重要なのは、そこから抹消された存在の痕跡の数々を探り当てることなのである。彼女が「突然変異」と呼ぶ、〈歴史〉における「予期せぬもの」―世界史の意図せざる「副産物」[18]―に、存在の光を与えること。その手法は確かに歴史（学）的であり、そして支配的な〈歴史〉を穿つ「政治的なもの」ともなるのである。

> レッド・カリブ特有の人相学的特徴を取り入れることで、かつての奴隷たちは「新しい」人種を形成したというよりも、交雑（ハイブリッド）した民族を形成したのである。現在の人類学的分類に当てはまらないだけでなく、農園主（プラント）による支配秩序（クラシー）にとって脅威となる民族である。ブラック・カリブには、小文字の歴史［une histoire］がある。それは植民地行政官や農園主（プランター）によって書かれたものの中に穿たれた裂け目である。彼らが歴史をもつのは、それが彼らによって力関係の歴史性［historicité］、植民者と隷属者との間の永続的かつ多面的な対立の鋭さが再び現れるからである。（三七一頁）

〈歴史〉の裂け目を穿つ存在にこそ光を当てることがドルランのような歴史家の役割であり彼女のアプローチの本質であるとすれば、その存在に声を与

16
Roger Bastide, *Les Amériques noires : les civilisations africaines dans le Nouveau monde*[1967], L'Harmattan, 1996.

17
Patrick Chamoiseau et Raphaël Confiant, *Lettres créoles, tracées antillaises et continentales de la littérature, Haïti, Guadeloupe, Martinique, Guyane, 1635-1975*, Hatier, 1991（パトリック・シャモワゾー／ラファエル・コンフィアン『クレオールとは何か』（西谷修訳）、平凡社、一九九五年）.

18
西谷修『世界史の臨界』、岩波書店、二〇〇〇年。

えることこそが文学と作家の果たす役割となるのだろう。この点において、ドルランの歴史的関心は、アンティル諸島を代表する作家であるエドゥアール・グリッサンの文学的野心と、大きく呼応することになる。なぜなら、このマルチニックの詩人もまた、「小文字の歴史が互いに出会うとき、大文字の〈歴史〉は終わる（« Là où se joignent les histoires, finit l'Histoire »）[19]」と繰り返し語ってきたからである。単一の起源を失い〈歴史〉からは抹消された存在、「正統な」系譜学から逸脱する／散逸するものの「痕跡」を探ること、そしてその相互の「出会い」から生じる「予期せぬもの」の生成―グリッサンの言葉で言えば「クレオール化」―に言葉を与えること、それこそが、グリッサンという作家の世界を導いているからである。作家になることを考えていたともいうエルザ・ドルラン[20]、彼女の野心は歴史的であり政治的であり、それゆえに文学的となるはずである。

（神戸大学／フランス語圏文学）

19
Édouard Glissant, *L'Intention poétique*, Seuil, 1969, p. 215.

20
公開合評会（二〇二四年七月二八日）での、ファヨル入江容子氏の発表による。